

## 平成二十九年卒業式式辞

ことのほか寒さの厳しい今年の冬でしたが、それでも少しづつ日が長くなるとともに日射しに春の気配がし、キャンパスにも春の花の時期が始まるようになっていきます。

本日、ここに岐阜県立国際園芸アカデミーを卒業してゆく二十三名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

ご参列の保護者の方々にも、心よりお祝いを申し上げます。

また、この度はご多忙にもかかわらず、岐阜県議会議長様はじめ議員の皆様、多数のご来賓の方々のご臨席を賜り、ここに岐阜県立国際園芸アカデミー卒業式を挙行できますことは、誠に大きな喜びでございます。皆様方には平素から本校の教育に多大なご支援、ご協力を賜っておりますことに、この場をお借りしまして改めて厚く御礼申し上げます。

さて、卒業生の皆さんは二年前に、園芸を生涯のなりわいとすべく、大いな志を胸に当校に入学してこられました。今、この日を迎えるにあたって、このキャンパスで学友と過ごした間の楽しかったことや苦しかったことなど色々な思い出がめぐってくると思います。共に学んだ友人、キャンパス、時間など、その思い出はお互いの人生にとってかけがいのないものです。その経験やここで得た人と人のつながりは、きっとこれからの人生にとって大切な糧となることを願っています。

ところで、皆さんが入学された二年前に、私が入学式の式辞で述べた、二宮尊徳の「世の中は、知恵があっても学があっても、至誠と実行がなければ、事は成らない。」という言葉覚えておられるでしょうか。この言葉の意味するところは、知識や学歴があっても、社会では誠実な心と実行がなければ実現しないという意味でした。皆さんは在学中に、自ら進んで園芸の現場に足を運び情報を収集し、気持ちを集めて実行に移すことができたでしょうか。

卒業は日本では業を終えるという意味ですが、アメリカではコメントメント・エクササイズといい、実習の始まりという意味があります。つまり、卒業は人生のスタートであり、実社会での学びの本番はこれから始まるということです。国際園芸アカデミーで学んだことを誇りとし、自信をもって実社会で生きて行ってほしいと願っています。

ここで社会への門出にあたり、手元にも示しました、これから述べる先人の言葉を捧げたいと思います。

その言葉は、「菊根分け、あとは自分の土で咲け」です。これは「宮本武蔵」や「新・平家物語」などの著作で有名な作家、吉川英治が知り合いの結婚式の際に、はなむけの言葉として贈った言葉だそうです。今は、菊の苗は挿し木で殖やされますが、以前は「根分け」と言っ、株を堀上げ、根元のところで根を付けて株分けして殖やしたものです。根分けされた個々の株に肥料や水をやり、支柱を立て、自然の風雨や病害虫からも守ってやることで、秋にりっぱな花を咲かせることができます。皆さんはこれまで、両親に大切に育てられ、学校で多くの先生方に見守られ指導されてきました。これからは、自分の力で舵を取り荒波を乗り切っていくかなければなりません。乗り切り方は、これまで学んできた多くのことが支えてくれるはずで。「あとは自分の土で咲け」、つまり、自分を信じてその道をしっかりと歩み、自分でしか咲かせられない努力の花を見事に咲かせなさいということです。先日まで開催されていた冬季オリンピックでも多くの選手が、これまで経験してきた悔しさをばねに努力をつみ重ね、りっぱな花を咲かせていました。

授業でも話しましたが、花は人の一生になくはならない変わらぬ友のようなものです。多くの人を和ませるだけでなく、自らにも癒しと慰めをもたらしてくれます。その様な花を扱える仕事につけるといのは、この上ない幸せなことなのです。

ここに卒業を迎えられる皆さんは、それぞれがりっぱな花を咲かせる能力をもっています。その潜在能力を最大限に発揮できるかどうかは、皆さん自身にあります。これからは現場での仕事を通して自らを高め、自立して行くのです。そこに人生の楽しみがあるはずで。現状に満足することなく、自分の能力と感性を信じて上を目指してくれることを心より願っています。

最後にあたり、ここにめでたく皆さんが卒業を迎えられるのは、日頃の努力のたまものであるのももちろんですが、同時に周りで支えてくれたご家族と職員のお陰でもあることも伝えておきたいと思います。その感謝の気持ちを忘れず、それに報いるのは、これからの人生において社会に還元してゆくことに他なりません。そのことをくれぐれも忘れないでください。

以上、皆さんの将来に幸多きことを祈って、はなむけの言葉といたします。

平成三十年三月二日

岐阜県立国際園芸アカデミー 学長 上田善弘